

## 研究者としてのキャリア形成と今後の課題

### —自分のこれまでの経験を研究に活かすために—

○ 東北福祉大学 二渡 努 (006727)

キーワード：外国人介護人材の受入れ、介護福祉士制度、介護教育

#### 1. 報告者プロフィール

##### ・自己紹介

岩手県立大学大学院博士前期課程修了後、介護福祉士養成施設（専門学校）の専任教員として社会福祉分野の教育を担当し、介護福祉士と社会福祉士の養成に携わる。社会福祉士と精神保健福祉士は取得していたが、介護福祉士を養成する教員として介護福祉士を取得する必要性を感じ、教員として勤務しながら介護福祉士を取得。日本人に加えて、留学生やEPA介護福祉士候補者に対して教育をする中で、外国人介護人材の活用と教育の重要性を感じる。

その後、社会福祉振興・試験センターにおいて、試験事務担当職員として勤務。「経済連携協定（EPA）介護福祉士候補者に配慮した国家試験のあり方に関する検討会」の報告に基づいた、全ての漢字に振り仮名を付記した問題用紙の作成、わかりやすい日本語への改善を行った試験問題の作成事務に関わる。

そして、厚生労働省福祉基盤課福祉人材確保対策室で主査（介護福祉専門官の業務内容を担当）として、技能実習制度への介護職種の追加や、在留資格「介護」の創設、介護福祉士養成施設への国家試験の漸進的導入に関わる業務を担当。

外国人介護人材の受入れスキームの在り方に強い関心がある。介護現場に対する理解を深めるため、介護職員として週1回程度就労している。2019年より現職。

##### ・研究を志した動機等

専門学校や社会福祉振興・試験センターでの業務において、研究について意識する機会は多くなかった。私が厚生労働省での勤務を希望した理由はいくつかあるが、最も大きな動機は、私が専門学校で勤務していた際、留学生が介護福祉士を取得しても、我が国で就労できないという現状に大きな疑問を感じ、意欲と能力を有する留学生をはじめとする外国人に対して介護現場での就労を可能とするスキームを構築する必要性を強く感じたことがある。厚生労働省に入省し、制度を構築、改正するという業務に携わる中で、政策は個人の思いだけで立案することはできず、実践と研究が政策を構築する大きな原動力となることを理解した。このことにより、研究の重要性と魅力を強く感じ、将来の選択肢として研究者となることを意識するようになった。

私は研究者を志してから日は浅いが、これまでの経験を研究者になるための準備期間と捉え、今後の研究に取り組みたいと考えている。

## 2. 研究者としてのキャリア形成の道のり

- ・これまでのキャリア形成過程の各局面で行ってきたこと

私は現職に就任するまでに3か所の職場で常勤職員として勤務してきた。専門学校で専任教員として勤務していた際は、紀要への投稿や専門雑誌の原稿執筆に取り組んだ。社会福祉振興・試験センターでは、研究を求められる環境になかったが、試験委員である大学教員の先生方と一緒に仕事をする中で、自分の見識を広げることができた。厚生労働省において、シンクタンクの研究者と共に調査研究を行ったことは、非常に有益な経験となった。どの職場においても、たくさんのことを学ぶことはできたが、研究者としてのキャリア形成という観点から振り返ると、論文投稿など、研究職としてのキャリア形成の取組は不十分であったと感じている。

- ・各局面で感じたこと等

大学教員の採用を目指し、就職活動を行う中で、研究者としてのキャリアを形成するためには、研究実績を積み上げることが何よりも重要であることは自明であるが、大学教員としての採用に当たっては、応募資格を満たさなければスタートラインに立つこともできないと感じた。このことから、社会福祉士実習演習担当教員講習会を受講するなど、応募資格をクリアすることを意識した。また、自身の専攻分野と担当科目との関連も非常に重要となる。このような採用に向けての戦略的な取組は、研究者を志す早い段階で検討する必要があると感じた。

## 3. 求められる研究支援

- ・こんな支援が必要と考えること

科学研究費助成事業の採択率は研究者としての能力を示す重要な指標であり、採択に向けてチャレンジしたいと考えている。しかし、私はこの点については知見が不足しており、申請書類の書き方に関するアドバイスなどの支援を受けたいと考えている。研究者同士はライバル関係となるため課題もあると思うが、若手研究者に対するニーズはあるのではないかと推察する。

- ・学会に求めること等

今回、自身のこれまでの取組とこれからの展望を整理する貴重な機会をいただいたことに感謝している。若手研究者や研究者を目指す若手の中には、周囲に同年代の研究職を志す仲間との接点がなく、自身のキャリアデザインが思うように描けないという方も一定数存在するのではないかと思う。特に以前の私のように本務が研究者ではない仕事に就いていたり、研究者となって日が浅い者にはそのような傾向があるのではないだろうか。

そのため、学会に対しては、今回のように若手研究者を対象としたシンポジウムなどを定期的で開催し、その中で明らかになった悩みや課題を共有し、その解決に向けて継続的に取り組んでいただくことを希望したい。